

近代日本における女性出稼ぎ労働者とキリスト教

—美濃ミッションを事例として—

麻 生 将

I. はじめに

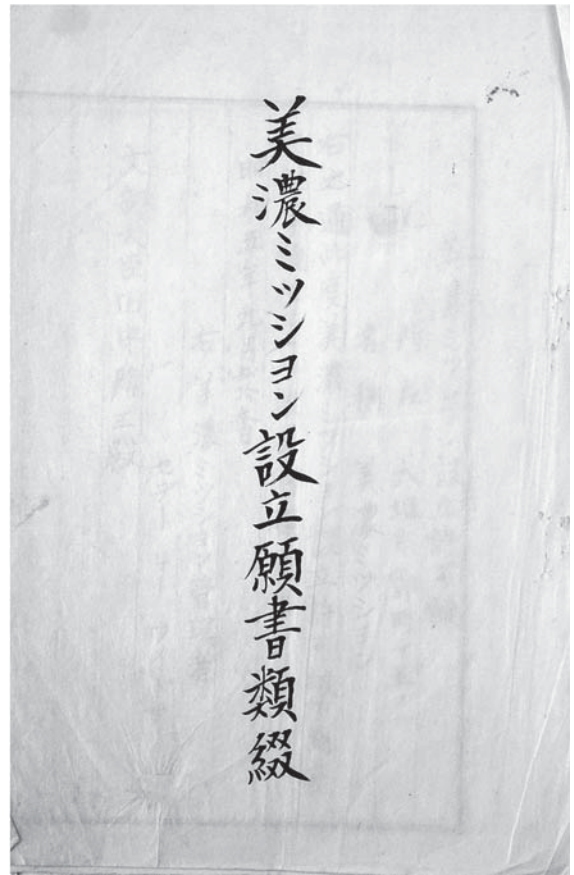
近代の日本には故郷から遠く離れた繊維関係の工場への出稼ぎ労働を行っていた女性¹⁾（以下、特に断りがなければ、本稿では単に「女性出稼ぎ労働者」とする）が多数存在した。彼女たちは地方の経済的に決して豊かではない家庭の出身で、繊維産業の盛んな都市にあった繊維関係の工場で過酷な労働を強いられながら、家族に送金していた。彼女たちの大半は工場の寄宿舍で生活していたが、工場が立地していた当該地域社会の人々からは軽蔑と差別の眼差しを向けられていた。たとえば松井（2000）によれば、女性出稼ぎ労働者たちが勤務していた工場の周辺地域から偏見や蔑視の眼差しを向けられる中で彼女たちがとった言動や振る舞いを通してある種の異議申し立てや抵抗を行っていたという²⁾。もちろん、全ての女性出稼ぎ労働者が一様で均質な偏見や差別の眼差しを向けられていた訳ではないだろうが、経済的に困難な状況に置かれ、故郷を離れて長時間の過酷な労働に従事せざるを得ず、加えて少なからぬ蔑視や差別の眼差しを向けられていたことは心に留めておく必要がある。

さて、近代日本にあって社会的・経済的な周縁に置かれていた女性出稼ぎ労働者たちに対してキリスト教会が関わりを持ったケースが複数確認できる。たとえば鄭、李、樋口らが行ったライフヒストリー調査では、岸和田市の紡績工場に出稼ぎに来ていた朝鮮半島出身の女性たちとプロテスタント系の教会との関わりの様子が明らかにされている。この場合は近代の日本における朝鮮人への差別の問題も関わってくるが、教会での人間関係や信仰が彼女たちの心の支えとなっていた事例が報告されている³⁾。こうした女性出稼ぎ労働者の大半は一般信徒として教会に所属しており、教会側ではなく一般信徒の視点で分析されている。それに対して教会側の視点から女性出稼ぎ労働者をはじめとする一般信徒と教会との関わりを検討したものとして、原の一連の研究が挙げられる。たとえば原（1996）では、群馬県のある教会の十五年戦争下での歩みについて残された教会の資料から考察し、その中で付近の製糸工場の女性労働者が礼拝に参加していたことが指摘されているが、彼女たちの出身地や居住地、勤務先や人数などの具体的な状況については言及されていない⁴⁾。また、原（2002）では太平洋戦争中の日本基督教団所属のいくつかの教会の伝道の状況について、信徒数および礼拝出席者数の推移を含む史資料を用いて分析しているが、一般信徒の具体的な情報については特に述べられていない⁵⁾。さらに、近代期の美濃ミッションについては、麻生（2008）が1930年代前半に発生した美濃ミッション事件について検討しているが、ここでも美濃ミッション所属の一般信徒の具体的な状況について殆ど言及されていない⁶⁾。

このように、近代のキリスト教会と一般信徒との関わりや教会の活動の様子については、キリスト教史の分野でいくつかの先行研究が見られるが、教会の信徒一人一人の個別の経歴や職業、出身地や居住地などに注目した研究、すなわち教会側からみた一般信徒と教会との関わりについての研

究は管見の限り必ずしも多くはない。史資料の成約も考慮せざるを得ないが、こうした分野の研究の蓄積を進めることにより、近代日本のキリスト教会と女性出稼ぎ労働者との関わりについての研究を充実させることが今後も望まれるのではないだろうか。

そこで本稿では岐阜県大垣市を拠点に岐阜県西部で活動していた美濃ミッションというプロテスタントの教団が女性出稼ぎ労働者とのどのような関わりを持っていたのかについて、美濃ミッション所蔵の史資料をもとに検討し、近代日本のキリスト教会と女性出稼ぎ労働者との関係の一端をとりわけ教会側の資料から明らかにしたい。本稿で使用する資料は、美濃ミッションに所蔵されている写真類、『美濃ミッション設立願書類綴』(第1図)などの文書資料、美濃ミッション発行の定期刊行物「聖書の光」のほか、美濃ミッション関係者への聞き取り(2005年3月と2017年11月に実施)内容である。



第1図 美濃ミッション設立願書類綴

注：美濃ミッション所蔵、2017年11月4日筆者撮影。本稿の写真類も全て同じ。この綴の中に『信徒名簿』や『美濃ミッション所属教会規約綴』、所属スタッフの履歴書、などが含まれている。

Ⅱ. 美濃ミッションについて

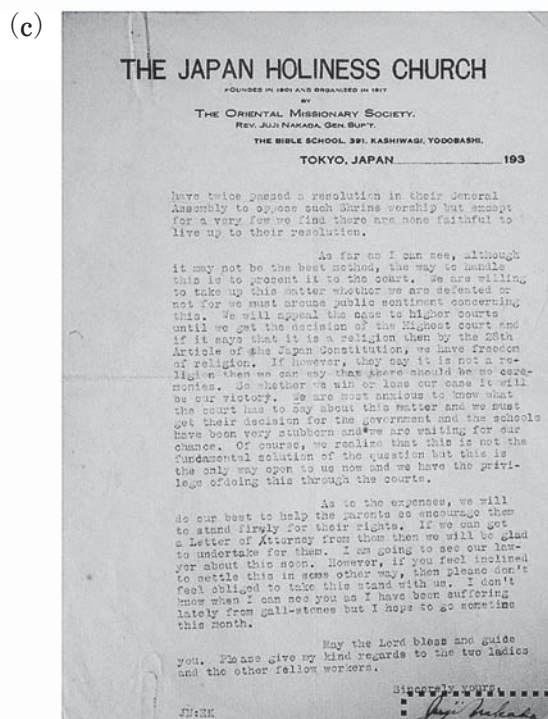
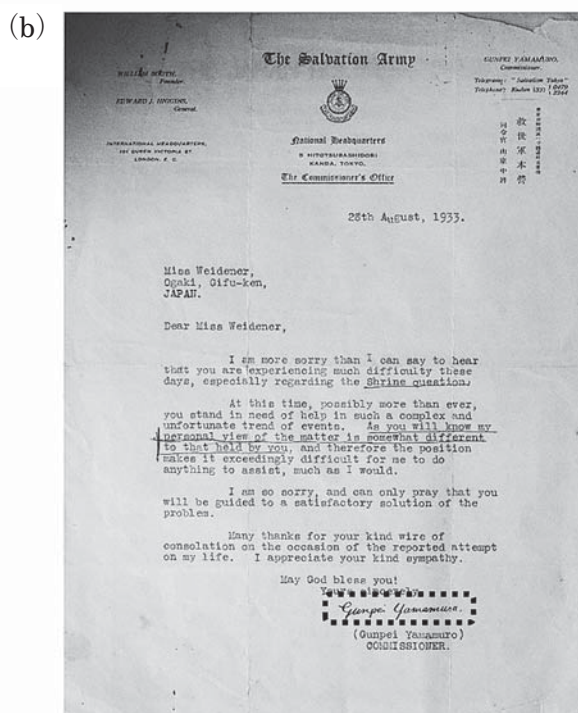
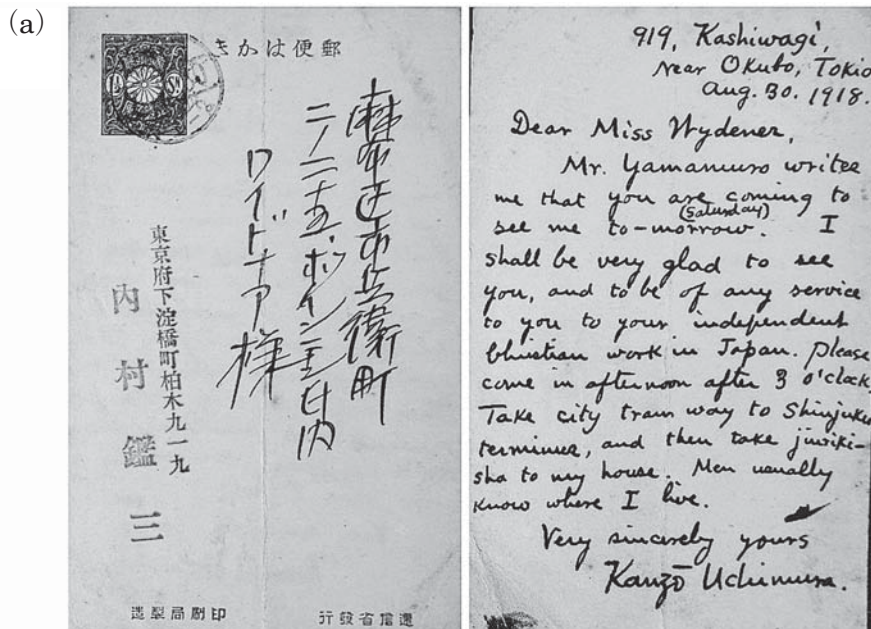
美濃ミッションは後述のように、アメリカ人女性宣教師セディ・リー・ワイドナー（以下、ワイドナーと呼ぶ）によって1918年岐阜県大垣市に設立されたプロテスタント系の教団である。第2図から分かるように、美濃ミッションが本部を置いていた戸田伯爵家老屋敷(第3図)は大垣城の南東に存在しており、そこは旧市街の中心部であった。大垣市は江戸時代には戸田藩の城下町であった。江戸期までの主な産業は農業と綿織物であったが、明治期以降は近代化とともに工業化が進んだ。第2図は1930年頃の大垣市の中心市街地であるが、1889年に全線開通した東海道線の沿線に紡績をはじめとする繊維産業の工場が立地し、大垣を中心とする西美濃地方は明治以降、紡績・繊維産業の一大集積地であった⁷⁾。

ここで、1930年当時の大垣市の宗教状況について1930年発行の『大垣市史』を元に説明する。まずは仏教の寺院数であるが、全部で60の寺院が立地していた。内訳は真言宗が8、天台宗2、臨済宗6、曹洞宗2、浄土宗8、浄土真宗が28(このうち本派が4、大谷派24)、専修寺1、日蓮宗3、仏道教会2となっており、大垣市の寺院の半数近くが浄土真宗の寺院であった。

神社については県社、招魂社・神宮奉斎宮が各2、村社が21、無格社が18であった。美濃ミッションに所属していた小学生信者が参拝を拒否したことに端を発する排撃事件の契機となった常葉

名入りの国民読本を贈られた事があることから、日本の教育界において少なからぬ影響力を持っていたと考えられる。

くわえてワイドナーは近代日本のキリスト教関係者たちと交流を持っていた。第4図の(a)は再来日後に大垣市に移る前に東京府内に居住していたワイドナーに送られた葉書で、送り主は内村鑑



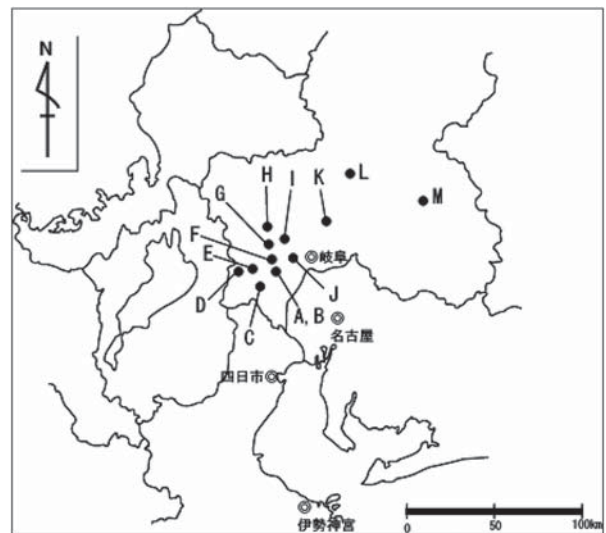
第4図 ワイドナー宛のキリスト教関係者からの書簡類

注：美濃ミッション所蔵。(a) 内村鑑三からの葉書、(b) 山室軍平からの書簡、(c) 中田重治からの書簡。

三である。この葉書には日本救世軍の創始者であった山室軍平からの紹介でワイドナーと面会する日時と場所について書かれている。日本での布教を始めるに当たりワイドナーは山室軍平と内村鑑三に布教する土地を相談した。すると両者からの「西美濃がもっとも困難である」との回答を受け、「あえて困難な土地で布教せよとの神の御心」に基づいて西美濃での布教を決断、1918年11月に旧城下町であった大垣市の戸田伯爵家老屋敷を借り受けて「美濃ミッション」を、翌年「私立大垣基督教幼稚園」を設立したという¹²⁾。また、第4図の(b)は先の山室軍平から、(c)は日本ホーリネス教会設立者の中田重治からそれぞれ送られた書簡である。こうした葉書や書簡からも分かるように、ワイドナーは近代日本を代表する複数のキリスト教関係者と交流を持っていた。

ワイドナーが美濃ミッションを設立した当初は単立の教会で、小学生前後の児童にキリスト教の教義や知識などを教える日曜学校を通して布教する予定であった。しかし、最初の日曜学校に集まっていた児童がその翌週から全員欠席した。ワイドナーがその理由を尋ねたところ、「あの耶蘇に子どもを取られる」と危機感を抱いた市内の全ての仏教寺院が同様に日曜学校を始めたためであったという¹³⁾。そこでワイドナーは本格的な教育活動の必要性を感じて同年、「私立大垣基督教幼稚園」を設立した。その後、アメリカ人宣教師や日本人スタッフが教会の活動に加わるとともに、複数の教会や伝道館(伝道所)を岐阜県西部の町村に設立していった。『美濃ミッション設立願書類綴』によると、1930年の時点で教会6、伝道所6、聖書学校1校、125名の一般信徒に伝道師・牧師・宣教師や幼稚園教諭などの教団関係者がおよそ20名という規模で、教会の大半は西濃地方に立地していた(第5図)。このような分布は先に述べたようなワイドナーの布教に際しての信仰的なビジョンに基づくと考えられる。

後述するように美濃ミッションは大垣市を中心に西濃地方で布教活動や社会福祉活動を行っており、地域社会との関係も少しずつ構築されてきていたが、設立から約10年後の1929年とその4年後の1933年の二度にわたって美濃ミッションへの排撃事件(美濃ミッション事件)が発生した。これは美濃ミッション所属の小学生信者が信仰上の理由により学校行事での神社参拝を拒否したことがきっかけとなり、大垣市の様々な個人や集団によって展開された美濃ミッションに対する排撃事件のことである。この事件では美濃ミッションへの批判や排撃に関わる種々の言説が地元新聞紙上で連日報道された。特に1933年の排撃事件では「私立大垣基督教幼稚園」に子どもを通わせていた家庭に対して地元小学校のPTA組織が退園届けを半ば強制的に提出させたのをはじめ、排撃講演会の開催や美濃ミッション関係者への暴力、第3図の戸田



第5図 1930年当時の美濃ミッション教会の分布図

注：A: 美濃ミッション本部と大垣教会(大垣市) B: 朝鮮教会(大垣市) C: 高田教会(養老郡高田町) D: 関ヶ原伝道館(不破郡関ヶ原町) E: 垂井伝道館(不破郡垂井町) F: 赤坂伝道館(不破郡赤坂町) G: 池野伝道館(揖斐郡池野村) H: 揖斐教会(揖斐町) I: 黒野伝道館(揖斐郡黒野) J: 北方伝道館(本巣郡北方町) K: 美濃町教会(武儀郡美濃町) L: 八幡教会(郡上郡八幡町) M: 黒川教会(加茂郡黒川町) 『美濃ミッション設立願書類綴』をもとに作成。なお、凡例中の「伝道館」は伝道所(牧師・宣教師が常駐しない、教会に準ずる施設)のこと。

伯爵家老屋敷の焼き討ち未遂事件、美濃ミッション関係者への地元警察の取り調べ、地元選出の代議士による美濃ミッション排撃の呼びかけなどが見られた。事件そのものは幼稚園の閉園にともなって自然に終息していき、1940年に活動休止するまで美濃ミッションへの大きな排撃は見られなかった¹⁴⁾。

その後ワイドナーは1939年に病気のためアメリカへの帰国の途上、64年の生涯を閉じた。翌1940年には美濃高田教会の牧師が東京へ移ったのをきっかけに美濃ミッションは1946年まで活動を停止した。太平洋戦争中の42年には元美濃ミッションの牧師2名が検束され、美濃ミッションに関する資料はすべて没収されたという¹⁵⁾。

1946年、美濃ミッションはワイドナーとともに活動していたアメリカ人宣教師によって再開されたが、本部は三重県四日市市に移っている。その理由は聞き取りによると、牧師を初めとする教職者の不足や交通の発達¹⁶⁾、戦前美濃ミッションが布教活動を行っていた地域に戦後他のキリスト教諸教派、教団が進出したことである。1951年、本部を三重県四日市市に移し、岐阜県内と三重県内にそれぞれ教会が2つずつ設立された¹⁷⁾。2017年現在は日本人牧師によって教会運営が行われている。

Ⅲ. 美濃ミッションを構成した人々

1. 美濃ミッションの活動状況

前章では美濃ミッションの歴史と現況の概要を述べた。本章ではもう少し踏み込んで、設立者のワイドナー宣教師が中心となっていたころ、すなわち大正から昭和戦前期という時代にあって美濃ミッションがどのような活動を行っていたかについて具体的に見ていきたい。

『美濃ミッション設立願書類綴』には美濃ミッションの主な活動として「日曜学校ヲ開設シ児童集会ヲナシ官立学校生徒ノ聖書英語組、又福音書、トラクト配布等ヲ以テ事業トス。一九一九年（大正八年）五月十四日、時ノ鹿子木知事ノ認可ヲ得テ大垣市宮町一〇五四番地ニ於テ八名ノ幼児ニヨリテ私立大垣基督教幼稚園開設、一九二〇年（大正十一年）郭町十五ノ一ナル現本部ニ移転ス」と記載されている。前章で述べたように、美濃ミッション設立とほぼ同時に開園した私立基督教大垣幼稚園には大垣市内の医者や市会議員の子弟が通っていた。**第6図**は1919年頃の幼稚園での活動の様子を写したものである。ポストカードの裏にこうした写真が印刷されていたことから、ワイドナーの出身教会など美濃ミッションを支援していたアメリカの教会への活動報告も兼ねて郵送されていたと考えられる。この幼稚園については、後に美濃ミッション事件が生じた際には地元新聞紙上で大垣市議会議長の「大垣市郭町に基教幼稚園を経営するワイドナー氏に対し市からも相当の補助金でも出してこれが助成をなし感謝せねばならないと思って」¹⁸⁾ いたとの発言が報じられたことから、大垣市の行政関係者からも少なからず評価されていたといえよう。

また、**第7図**のように、幼稚園の他にも小学生を対象に日曜学校を行っていた。写真には40名ほどが写っており、こうした児童への布教活動に力を入れていたことがうかがえる。さらに**第8図**は旧制中学の生徒、教師、ワイドナーが写った集合写真である。活動概要の中に「官立学校生徒ノ聖書英語組」とあることから、ワイドナーは大垣市の公立学校で聖書と英語の授業を担当しており、その際撮影されたのであろう。当時、旧制中学に通う生徒は経済的にある程度余裕のある家庭の出身



第6図 私立大垣基督教幼稚園のポストカード
注：1919年頃のもの。



第7図 美濃ミッションの日曜学校
注：年代不明。



第8図 旧制中学の生徒たちとワイドナー
注：年代不明。

であったことと、先の幼稚園の生徒が市議員や医者の子弟であったこととを併せて考慮すると、美濃ミッションは大垣市の中でも相対的に上の社会階層の人々との接点を日常的に持っていたことになる。この点は近代の日本におけるキリスト教、とりわけプロテスタントの諸派は都市部の中産階級以上の人々に受容され、また彼らを主要な布教対象にしていたという先行研究とも合致する¹⁹⁾。

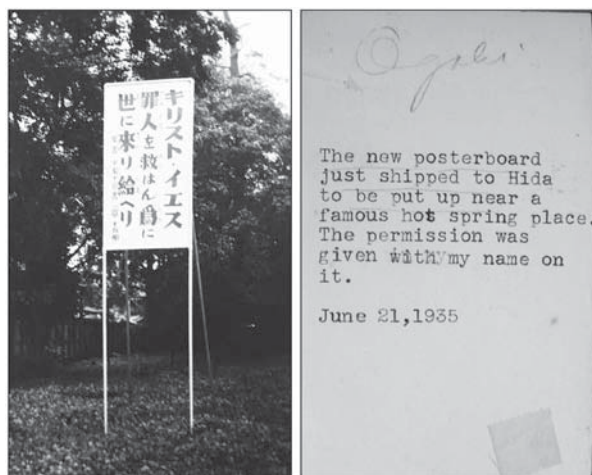
その一方で美濃ミッションは路傍伝道（道端での布教活動）やトラクト（布教に用いるパンフレット）および聖書の配布などの地道な布教活動を行っていた。『美濃ミッション設立願書類綴』には牧師や伝道師とともに「聖書分冊配布者」の人名も記載されている。また、大垣市以外の町村では天幕伝道（移動式のテントでの伝道集会）を行っていた。第9図は1924年頃の天幕伝道の写真であるが、相当数の聴衆が集まっていたことが分かる。戦前の美濃ミッションは都市部のみならず西濃地方の各町村での布教活動も行っていた。さらに興味深いことに、美濃ミッション事件の後も岐阜県各地で布教活動を行っていた。第10図は飛騨地方の温泉地の近くに設置された伝道のための看板で、聖書の一節が記されている。この写真の裏面には1935年6月21日という日付が記されており、1933年の美濃ミッション事件の後も岐阜県内で布教活動が行われていた事とともに、美濃ミッションが1933年以降表立って激しく排撃されなかった事を示している。

さて、美濃ミッションの主な活動概要について見てきたが、もうひとつの重要な活動について述べておきたい。美濃ミッションは当時経済的に裕福ではない人々や社会の周縁部に追いやられ、差別されていた人々に対して積極的にアプローチしていた。たとえば、ワイドナーは寡婦となった女性とその子供を引き取って美濃ミッション本部に住まわせたり、孤児を養子として迎えたりしてい



第9図 天幕伝道の様子

注：上は年代不明、下は1924年頃。



第10図 美濃ミッションが設置した立看板の写真（左）とその裏面（右）



第11図 美濃ミッションの朝鮮人教会の集合写真

た²⁰⁾。第11図の在日朝鮮人の教会の集合写真のように、美濃ミッションは大垣市内に朝鮮人教会を設立していた。2005年の聞き取り調査によると、昭和戦前期の大垣市の在日朝鮮人の多くが日本語を話せなかったため、ワイドナーは彼らのために朝鮮語と英語を理解できる牧師を招聘し、1929年ごろに朝鮮人教会を設立したという。この朝鮮人教会は『美濃ミッション設立願書類綴』にも記載されており、美濃ミッションは設立して間もない頃から在日朝鮮人との関わりを有していた²¹⁾。

くわえて、大垣市やその周辺部の紡績工場へ布教活動も行っていた。当時大垣市や関ヶ原町などの岐阜県西部には前述のように紡績、繊維産業が集積していた。そこでは多くの女性出稼ぎ労働者が働いており、彼女たちへの布教活動の結果、1930年頃には複数の女性出稼ぎ労働者が洗礼を受け、キリスト教信者になった²²⁾が、1930年の美濃ミッション事件の際にはこうした紡績工場での宗教活動が一時的に制限されたという²³⁾。後で詳しく述べるように、美濃ミッションと女性出稼ぎ労働者との関係が昭和戦前期には明確に認められたのである。

このように、美濃ミッションは大垣市とその周辺地域の多様な人々との関わりを持ちながら活動していたのだが、具体的にどのような人々が教会に所属していたのだろうか。次節ではこの点について『信徒名簿』をもとにもう少し詳しく検討してみたい。

2. 信徒名簿からみた美濃ミッション関係者の地域的多様性

次に美濃ミッションに所属していたスタッフと一般信徒の居住地や出身地について概観する。『美濃ミッション設立願書類綴』には宣教師や牧師、幼稚園教諭といった教団スタッフの氏名と詳細な履歴書が記載されている。宣教師はワイドナーを含め3名が所属しており、全員がアメリカ出身であった。また、牧師や伝道師、幼稚園教諭の出身地も多様であった。美濃ミッションのスタッフは岐阜県出身者のほかに北海道、東京府、千葉県、神奈川県、山梨県、長野県、富山県、愛知県、兵庫県、高知県、熊本県、朝鮮咸鏡南道（現在の朝鮮民主主義人民共和国）の各地の出身者で構成されていた。幼稚園教諭のうち何人かはワイドナーが宮城女学校の教員時代の教え子であり、美濃ミッション設立後にワイドナーがスカウトしてきたという²⁴⁾。

このようにスタッフの大半が岐阜県外の出身者で占められていたが、一般信徒の中にもまた複数の県外出身者が見られた。**第1表**は『美濃ミッション設立願書類綴』の信徒名簿に記載されていた信徒の都道府県ならびに市町村別の出身地を示したものである。この表の一般信徒の合計は125名となっているが、これは美濃ミッション経営の幼稚園教諭や伝道師、婦人伝道師を『信徒名簿』から除いた人数である。この表からは美濃ミッション所属の一般信徒のうち大垣市内在住の信徒数は45名（36%）である。また、大垣市以外の県内在住の信徒数57名と合わせると102名（81.6%）で、およそ五分の四が岐阜県内に居住していたことになる。残り五分の一は県外出身者であるが、東日本や北陸、関西、九州地方の出身者が多い。美濃ミッションは大垣市を中心とする岐阜県西部で布教活動を展開していたため、所属する一般信徒の多くは岐阜県在住者または岐阜県に本籍を有していたのはいうまでもないが、他府県の住所記載については、信徒名簿を作成する際に現住所を書いた信徒と本籍地を書いた信徒が混在していたと考えられる。

つづいて、教会別の信徒数について確認しておきたい。**第2表**を見ると、美濃ミッション全体の一般信徒の男女比はほぼ1:3で女性の割合が多くなっている。ただ、名簿から確認できる範囲で個別の教会の比率を見たときに、大垣教会は1:3だが、揖斐教会のように男女同数の教会もあれば、美濃町教会のように男性信徒の方が多い教会も確認できる。もちろん、信徒名簿に記載されている以外にも礼拝に日常的に出席していた人々も数多く存在したのであろう。いずれにせよ、教団全体でみれば女性信徒の方が総数は多かったことになる。一般にキリスト教の教会の男女比は女性の方が多いと言われているが²⁵⁾、昭和戦前期の美濃ミッションの場合、その背景として岐阜県西部の紡績・繊維関係の工場で勤務していた複数の女性出稼ぎ労働者の存在が挙げられよう。そこで次節では1930年当時の美濃ミッションを構成していた女性出稼ぎ労働者の様子について詳しく見ていきたい。

IV. 美濃ミッション所属の女性出稼ぎ労働者

1. 教会を構成する女性出稼ぎ労働者

前述の**第1表**中の灰色部分は信徒名簿の住所記載のうち、女性出稼ぎ労働者のものである。この表からも明らかなように、紡績工場の社宅を住所として記載する場合と、岐阜県外の出身地（おそらく本籍地と思われる）を記載する場合とがあった。**第3表**は信徒名簿に記載されていた人々のうち、女性出稼ぎ労働者の人数を示したものである。**第1図**中の日本紡績の工場に勤務していた女性出稼

第1表 美濃ミSSIONの一般信徒の住所

住所1	住所2	男性	女性	不明	計
岐阜県	大垣市郭町	1	3		4
	大垣市歩行町	1			1
	大垣市西崎町	1	1		2
	大垣市鷹匠町	1	1		2
	大垣市藤江町	2	4		6
	大垣市東長町	1			1
	大垣市東代官町	1			1
	大垣市南寺内町	1	1		2
	大垣市田町北ノ町	1	2		4
	大垣市林町日本紡績・日本紡績住宅		17		17
	大垣西船町製糸工場		1		1
	大垣市木戸町中央毛糸		1		1
	大垣市室町		1		1
	大垣市林町	1	1		2
小計		11	33		45
岐阜県	安八郡多芸島村		2		2
	安八郡大藪町			1	1
	安八郡中川村林	1			1
	安八郡二木村下新田			1	1
	安八郡福束村		1		1
	武儀郡美濃町	11	10		21
	揖斐郡本郷村字山洞		1		1
	揖斐郡揖斐町三輪		2		2
	揖斐町若山医院方	1			1
	揖斐町栄町	1			1
	本巣郡北方町	1			1
	不破郡関ヶ原町日本紡績舎宅・寄宿舍	1	11		12
	養老郡高田町	1			1
	養老郡高田町東町		1		1
	養老郡高田町北町		1		1
	養老郡一ノ瀬村川東		1		1
	郡上郡川合村	1			1
	郡上郡八幡町	2	4		6
	加茂郡黒川村		1		1
小計		20	35	2	57
福島県	二葉郡新山町目迫		1		1
長野県	更級郡信田村字高野		1		2
	更級郡塩崎村角間		1		
新潟県	北蒲原郡菅谷村		1		6
	中蒲原郡金津村古津		2		
	中蒲原郡小須戸町横川村		1		
	魚沼郡六日町大日		1		
	刈羽郡七日町上栗田		1		
栃木県	那須郡芦野町		1		1
東京都	東京市芝区高輪二本榎西町		1		1
福井県	丹羽織田村織田		3		3
愛知県	名古屋市東区名古屋中学校寄宿舍	1			3
	名古屋市南区熱田豊田紡績		1		
	名古屋市南区豊田町宮西		1		
大阪府	大阪市此花区四貫島千島町		1		1
京都府	京都市四条壬生車庫前	1	1		2
兵庫県	氷上郡柏原町		1		1
鹿児島県	大島郡和泊村		1		3
	大島郡白山中野		1		
	大島郡知名村		1		
小計		2	22		24
合計		33	90	2	125

注：『美濃ミSSION設立願書類綴』をもとに筆者作成。

第2表 美濃ミSSIONの各教会の教会関係者数と一般信徒数

教会名	所在地	教会代表者	教会関係者					一般信徒			
			宣教師	牧師・伝道師	婦人伝道師	幼稚園教諭	計	男性	女性	不明	計
大垣教会	大垣市	セディ・リー・ワイドナー	3	4	1	3	11	14	51	2	67
朝鮮教会		張道源		1			1	—	—		—
高田教会	養老郡高田町	伊能倉治郎		1	1		2	1	3		4
揖斐教会	揖斐町	駒井梅		1			1	2	2		4
美濃町教会	武儀郡美濃町	柳瀬直弥		2			2	12	10		22
八幡教会	郡上郡八幡町	佐伯茂子			1		1	3	4		7
黒川教会	加茂郡黒川町	桑原永秋		1			1		1		1
関ヶ原伝道館	不破郡関ヶ原町	—						1	19		20
垂井伝道館	不破郡垂井町	—						—	—		—
赤坂伝道館	不破郡赤坂町	—						—	—		—
池野伝道館	揖斐郡池野町	—						—	—		—
黒野伝道館	揖斐郡黒野町	—						—	—		—
北方伝道館	本巣郡北方町	—						—	—		—
小計			3	10	3	3	19	33	90	2	125

注：『美濃ミSSION設立願書類綴』をもとに筆者作成。

第3表 工場別的美濃ミSSION所属の女性出稼ぎ労働者数

教会名	信徒数	勤務先				計（女性）
大垣教会	69	豊田紡績 （名古屋市）	日本紡績 （大垣市）	製糸工場 （大垣市）	中央毛糸 （大垣市）	30（30）
		9	18	1	1	
関ヶ原伝道館	20	日本紡績 （関ヶ原町）				20（19）
		20				

注：『美濃ミSSION設立願書類綴』をもとに筆者作成。

ぎ労働者の住所は信徒名簿に「日本紡績社宅」と記されている。また、住所が「大垣市西船町製糸工場」や「名古屋市南区熱田豊田紡績」などの記載については、工場の社宅に居住していた女性出稼ぎ労働者と見て間違いないであろう。

第3表で注目すべきは、大垣教会の信徒67名のうち4割以上にあたる30名がこうした女性出稼ぎ労働者であったという点である²⁶⁾。美濃ミSSIONは先述のように、幼稚園経営や旧制中学での教育活動を通して大垣市内の比較的裕福で社会階層の高い人々と日常的に関係を持つと同時に、経済的に決して裕福ではなく、工場周辺の地域社会から差別や軽蔑の眼差しを向けられ、社会経済的に周縁のポジションに置かれていた女性出稼ぎ労働者との関わりを相当程度強く持っていたことが裏付けられる。

また、関ヶ原伝道館の信徒名簿には20名全員が関ヶ原町の日本紡績に勤務しており、うち19名が女性であった。この20名の住所を見ると、「関ヶ原町日本紡績舎宅」だったのは12名（うち1名は男性）で、8名は出身地（もしくは本籍地）の住所が記されている。鹿児島県奄美群島や新潟県、福井県の村名が見られることから、地方出身の女性たちが紡績・繊維産業が盛んであった岐阜県西部に出稼ぎ労働のために来ていたことがうかがえる。

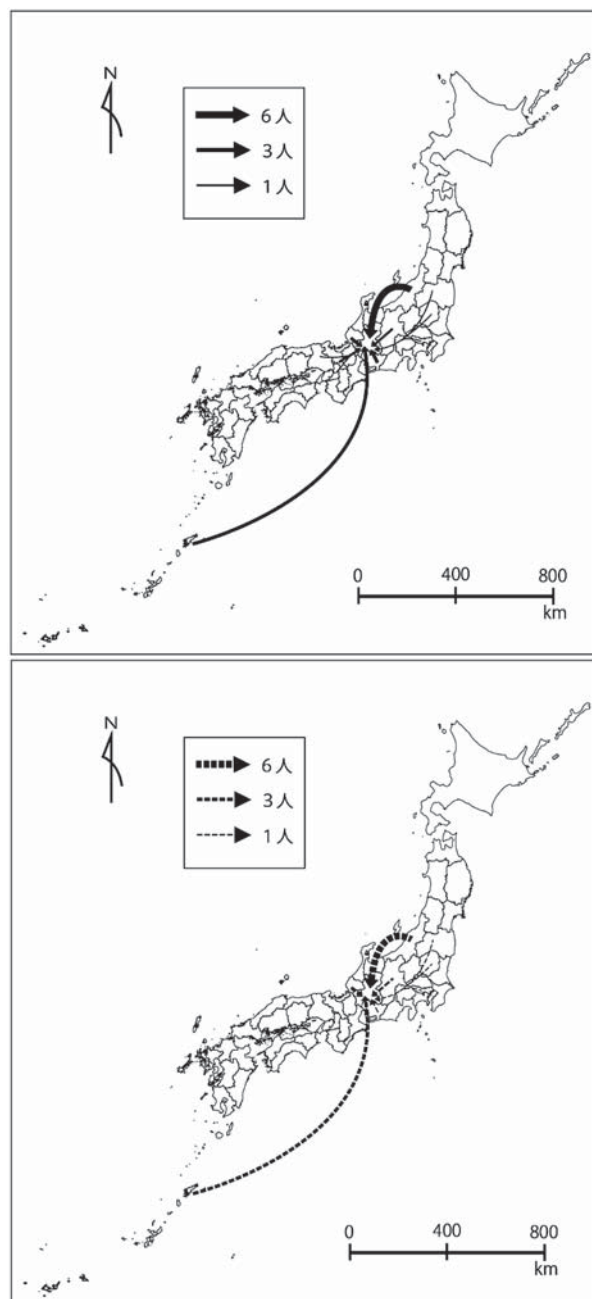
以上を地図化したものが第12図である。上は美濃ミSSION信徒全体の県外出身者を、下はそのうちの女性出稼ぎ労働者を示している。第1表の灰色部分とあわせて見ると、県外出身者の大半が女性出稼ぎ労働者であることは明白だが、その出身地は（a）新潟県や福井県といった日本海側の県、（b）福島県や栃木県といった東北・関東の県、（c）愛知県や長野県など隣接する県、そして（d）鹿児島県奄美群島、の四つに大別される。こうした地方出身の女性出稼ぎ労働者は岐阜県のほか名古屋

屋市の紡績工場でも働いていた。この地図は美濃ミSSIONの教会に所属する信徒の出身県を示したもののだが、大垣教会に所属していた女性出稼ぎ労働者のうち、名古屋市内の紡績工場勤務していた人々も信徒名簿から確認できる。このように、近代日本におけるこうした紡績・繊維産業の労働者が全国各地から移動してきていたのである。

くわえて、複数の女性出稼ぎ労働者たちが美濃ミSSIONの教会に通い、信徒となっていたということは、故郷を離れて過酷な労働に従事し、少なからぬ差別の眼差しを向けられていた彼女たちにとって教会が心の拠り所であったことを意味している。そこにはワイドナーが子ども時代に抱いていた「日本の貧しい少女たちに神の愛を伝え、救いたい」という動機ないしは信念が後々まで一貫して美濃ミSSIONの活動の重要な活動方針となっていたことが伺えよう。そして、昭和戦前期に関わりを持っていたこうした女性出稼ぎ労働者との人間関係が後年の全国各地でのキリスト教の活動や美濃ミSSIONの岐阜県外での布教活動につながっていくことになる。次節ではその事例を紹介したい。

2. 女性出稼ぎ労働者と美濃ミSSIONの時空間的展開

第13図は関ヶ原町の紡績工場で働いていた女性労働者の洗礼記念の写真である。この写真は1929年ごろのもので、クリスマスの日に洗礼を受けた記念に撮影されたという。前述したように、『聖書の光』83号によると、奄美群島の沖永良部島出身の女性出稼ぎ労働者たちは年末年始に故郷に帰省するには距離が遠すぎたため、工場舎宅で過ごしていたという。ワイドナーは彼女たちが里帰りできずに寂しく年末年始を過ごしていると考え、教会の正月のパーティに誘ったことが契機となって美濃ミSSIONの教会に通うようになり、やがて信仰を持って洗礼を受けた信徒が複数名いた。第13図の写真に写



第12図 岐阜県外の美濃ミSSIONの一般信徒の出身地

注：『美濃ミSSION設立願書類綴』をもとに筆者作成。上：一般信徒全体 下：女性出稼ぎ労働者



第13図 美濃ミSSION所属の女性出稼ぎ労働者

注：左：1929年 右：年代不明

る人物のうち、丸囲みの女性出稼ぎ労働者は後に故郷の沖永良部島に戻り、そこでプロテスタント系のグループ「イエス之御霊教会」所属の牧師と結婚、奄美大島の名瀬市で牧師夫人として、また教会の教職者として活動していた。1970年代の『基督教年鑑』にはこの女性の氏名とともに牧会していた教会の名称が記載されている²⁷⁾。沖永良部島から出稼ぎの労働者としてやって来た岐阜県西部で美濃ミッションの宣教師と出会い、信仰の道に入ったのち故郷に戻ってからは牧師夫人として教会の運営など重要な役割を担っていた。美濃ミッションは岐阜県西部というローカルなスケールで活動していたが、日本国内で見られた女性出稼ぎ労働者の移動と彼女たちへの布教活動の結果、戦後遠く離れた奄美大島でのキリスト教の布教活動の展開につながっていったのである。

また、現在の美濃ミッション代表の石黒イサク牧師によると、昭和戦前期に美濃ミッションで洗礼を受けていた沖永良部島出身の女性出稼ぎ労働者が第二次大戦後に一旦信仰の道から離れた後で再び故郷でクリスチャンになった女性との再会が契機となって美濃ミッションの奄美群島での布教活動が行われていたという²⁸⁾。さらに、同牧師のもとには近年、関東や東海、関西など各地のキリスト教関係者から「自分の父母（または祖父母）がかつて美濃ミッションに所属していたらしい。その詳しい資料があれば送ってほしい」との知らせが寄せられているという。もちろん、彼らの親族が女性出稼ぎ労働者だけとは限らないし、美濃ミッションとの関わり方も多様であったと考えられるので、より具体的で詳細なデータが必要になるが、現代の日本各地のキリスト教信者本人とその親族の信仰のルーツが昭和戦前期の美濃ミッションにさかのぼるという事例が現在でも確認できるのである。

このように、昭和戦前期の美濃ミッションの活動の空間スケールはローカルなものに限定されていたが、数十年の時を超えてナショナルな空間スケールに展開し、各地で宗教的・信仰的に少なからぬ影響を与えている実態をうかがい知ることができよう。換言すれば、これらの事実からは近代日本におけるキリスト教という一宗教の信仰と活動の時空間的な展開の一端が垣間見えるのである。いうまでもなく、その背景として大正から昭和戦前期にかけての紡績・繊維関係の出稼ぎ労働のための一時的で広範囲におよぶ人口移動が指摘できるが、同様の現象が第二次大戦以降の様々な時期に確認できるかどうか、あるいは他地域のキリスト教団体で見られたかどうかについても検討が必要であろう。

ただ、いずれにせよ、美濃ミッションという一つのプロテスタント教団による宗教活動は大正から昭和戦前期の岐阜県西部という限定的な地域に留まらず、第二次世界大戦を挟んで全国各地まで及ぶこととなった。多様な空間移動により同じ地域に集った人々が信仰的な関わりを通して交差したことにより、美濃ミッションの活動とその影響が数十年の時を超えて大垣市周辺から日本各地へと時空間的に展開していったのである。

V. おわりに

本稿では美濃ミッションというプロテスタントの教団に昭和戦前期に所属していた女性出稼ぎ労働者に着目し、彼女たちと教会との関わりや、その出稼ぎ労働のための移動について検討するとともに、その時空間的な展開について概観してきた。『信徒名簿』というキリスト教関係の内部資料から女性出稼ぎ労働者の人口移動の状況の一端を一定程度とはいえ明らかにできたことは、今後の女

性出稼ぎ労働者に関する諸研究の発展にも寄与しうるのであろう。また、美濃ミッションと関係を持っていた女性出稼ぎ労働者が後に故郷の地で基督教の活動に積極的に関わるとともに、時を超えての美濃ミッションの全国各地での活動にもつながっていった点も明らかになった。

一方、課題として次の点が示された。

ひとつは史資料の不足による分析の限界である。1930年以外の宣教師や牧師、一般信徒の状況を示す資料は今のところ確認されていない。石黒イサク牧師によれば、ワイドナー以外のアメリカ人宣教師は頻繁に交代していたので、一般信徒とりわけ女性出稼ぎ労働者の入れ替わりもまた見られたと考えられる。教会関係者のより動態的な実態の検討が望まれる。

もうひとつの課題は、女性出稼ぎ労働者の出身地（本籍地）記載の空間単位に関するものである。本稿では都道府県単位での分析にとどまったが、『信徒名簿』には出身市町村まで記載されているので、彼女たちの出身県内の市町村単位での分析の可能性が挙げられよう。岐阜県西部の紡績・繊維関係の工場への出稼ぎ移動のネットワークを考察する際には、こうした市町村単位の出身地（本籍地）の情報が必要不可欠になると予想される。

さて、本稿を締めくくるに当たり、先に述べた美濃ミッションの時空間的な展開についてもう少し広げて考えてみたい。そもそも美濃ミッションという大垣市周辺のローカルな基督教のグループは、アメリカ合衆国オハイオ州出身のワイドナーという女性宣教師が「日本の貧しい女性を救いたい」という動機によって来日し、つくりあげたものである。その意味では欧米からの宣教師によるグローバルな布教活動の展開の一事例として捉えることもできよう。ワイドナーもアメリカからの支援教会への活動報告や支援要請、支援に対する感謝の手紙を残していることから、岐阜県西部というローカルな範囲で活動しつつグローバルな関係性の中で美濃ミッションの活動が行われていたともいえる。その中で地方出身の女性出稼ぎ労働者たちとワイドナーとの出会いが第二次世界大戦後の日本各地での美濃ミッションの布教活動、すなわちナショナルな空間スケールでの布教活動へと展開していった。美濃ミッションという一つの基督教のグループの歴史を見るとき、そこには基督教信仰を共通項としてつながった多様な人々の活動や人生が数十年の時を超えてローカル・ナショナル・グローバル、という異なる空間スケールを絶えず横断しながら展開していった姿が明確に証しされるのである。

〔付記〕

本稿は2006年3月に立命館大学に提出した修士論文「宗教集団と地域社会との相互関係に関する言説空間をめぐる研究—1930年代の美濃ミッション事件を事例として—」および2012年3月に立命館大学に提出した博士論文「近代日本の基督教教会をめぐる社会・空間的排除に関する研究」の第4章と第5章を加筆修正したものです。本稿の作成にあたり、多くの方々のご支援を賜りました。とりわけ美濃ミッションの石黒イサク先生に聞き取り調査と資料閲覧でお世話になりました。この場を借りて篤く御礼申し上げます。そして、修士論文の調査でお世話になり、今は天の御国におられます美濃ミッションの石黒次夫先生に心から感謝申し上げます。

注

- 1) かつてはこうした女性は「女工」と呼ばれていたが、女性差別の意味を含む用語であるため、本稿では「女工」という用語を使用せず、このような表現とする。なお、松井（2000）は「女性寄宿労働者」とい

- う用語を用いている。本稿の用語が意味するところは松井の用語と同じである。
- 2) 松井美枝「紡績工場の女性寄宿労働者と地域社会との関わり」、人文地理 52-5、2000、59-73 頁。
 - 3) 鄭富京, 李相勁, 樋口洋一編『玄界灘を渡った女性信徒たちの物語: 岸和田紡績・朝鮮人女工・春木樽井教会』、かんよう出版、2015、176 頁。
 - 4) 原誠「15 年戦争下の高崎南教会」、基督教研究第 57 巻第 2 号、1996、1-25 頁。
 - 5) 原誠「戦時下の教会の伝道一教勢と入信者」、基督教研究第 63 巻第 2 号、2002、59-77 頁。
 - 6) 麻生将「宗教集団をめぐる社会 - 空間的排除のプロセス—1930 年代の「美濃ミッション事件」を事例として」、歴史地理学 50-3、2008、15-31 頁。
 - 7) ①平岡昭利・野間晴雄編『中部 I 地図で読む百年 愛知・岐阜・静岡・山梨』、古今書院、2000、51-56 頁、②『大垣市史 中』、大垣市役所、1930、599-631 頁。
 - 8) 前掲 7) ②、75 ~ 215 頁。
 - 9) たとえば森岡によれば、明治期の北陸地方や滋賀県、和歌山県などではキリスト教宣教師への激しい排撃がたびたび発生したが、特に浄土真宗の関係者による組織的な排撃が見られたという。森岡清美『日本の近代社会とキリスト教』、評論社、1976、195-210 頁、を参照のこと。
 - 10) ワイドナーの経歴については① 2005 年 3 月に実施した美濃ミッションでの聞き取りと②『美濃ミッション設立願書類綴』をもとにした。
 - 11) 前掲 10) ①。
 - 12) 前掲 10) ①。
 - 13) 前掲 10) ①。
 - 14) 美濃ミッション事件の詳細については、①前掲 6)、②麻生将「近代日本におけるキリスト教集団をめぐる排除の景観—1930 年代の二つの排撃事件を事例として—」、E-journal GEO 第 11 巻 1 号 2016、219-243 頁、③石黒イサク「『美濃ミッション事件』をめぐる」、(櫻井罔郎ほか編『日本宣教と天皇制』、いのちのことば社、2001、所収)、49-85 頁、④高瀬幸恵「1930 年代における小学校訓育と神社参拝 - 美濃ミッション事件を事例として」、日本の教育史学 50、2007、58-70 頁、を参照のこと。
 - 15) 2005 年の聞き取り調査によると、本稿で参照した史資料は美濃ミッションの別の宣教師が 1939 年ワイドナーとともに帰国した際に所持して行ったため、第 2 次世界大戦中の官憲による資料没収を免れたという。
 - 16) 戦前は交通が未発達であったことから、数十キロメートル圏内に複数の教会を設立したという。また、山間部への布教も頻繁に行なっていたので、自動車を使って山間部を巡回していた。「聖書の光」No.84、2002 参照。
 - 17) 前掲 10) ①によると、美濃ミッションは町内会で祭りの分担金を町内会費から支出することに対して反対を表明したり、工場労働者の日曜礼拝の権利を経営者側に訴えてそれを獲得したりと、地域社会との緊張を伴う実践を行ってきた。しかし緊張関係のみならず、1953 年の伊勢湾台風時の復興に協力するなど、地域社会との新たな関係も構築されていた。
 - 18) 美濃ミッション編、発行『神社参拝拒否事件記録 復刻版』、1992、24 頁。
 - 19) 前掲 9)、194 頁による。また、鈴木 (2001) によると、明治期の日本人がキリスト教に入信する際の障壁の一つに「イエ」や「ムラ」の共同体の制約が挙げられるが、都市ではその制約が相対的に弱いため、都市部でのキリスト教受容が盛んになった、という。鈴木範久『日本キリスト教史物語』、教文館、2001、102 頁、を参照のこと。
 - 20) 2005 年と 2017 年の美濃ミッションでの聞き取り調査による。なお、美濃ミッション本部に住み込みで働いていた母子家庭の小学生の子どもが伊勢神宮参拝拒否を理由に修学旅行への不参加を学校側に申し出たことが契機となって 1933 年の美濃ミッション事件が生じた。
 - 21) 2005 年の聞き取り調査による。なお、美濃ミッションは詳細な時期は不明だが昭和戦前期に桑名にも朝鮮人教会を設立し、第二次大戦後も教会は継続していたが、しばらくして現在の美濃ミッション本部に隣接する四日市市の教会に吸収合併されたという。
 - 22) 「聖書の光」No.83、2002。
 - 23) 前掲 14) ③、57 頁。

- 24) 2017 年 11 月 4 日の美濃ミSSIONの石黒イサク牧師への聞き取り調査による。
- 25) 現在の平均的な教会でも女性信徒の割合が高いところが多い。それは社会人男性が日曜日に仕事や職場関係の様々な行事によって教会の礼拝への出席が困難であることや、日曜学校の送り迎えを通じて子どもの母親が礼拝に通って信仰を持つようになることなどの結果、女性信徒の割合が多くなる事が多いと言われている。
- 26) なお、『信徒名簿』中で「大垣市林町日本紡績（社宅）」と記載されているのは 17 名だが、その隣の欄には栃木県那須郡芦野町の女性の氏名が記載されている。そして、美濃ミSSIONの石黒イサク牧師によると、名簿を作成する上で同じ紡績・繊維関係の女性労働者の氏名・住所をまとめて記載していた可能性が高いという。以上のことから、この栃木県の女性も日本紡績に勤務する女性出稼ぎ労働者と判断し、合計 18 名とカウントした。
- 27) 1970 年代に発行された『基督教年鑑』には、この人物が奄美大島に存在した複数の教会のうち名瀬市内の教会の代表者として記載されている。おそらく牧師夫人として支部教会の代表を勤めていたと考えられる。
- 28) 美濃ミSSIONの石黒イサク牧師への聞き取りによる。

(本学文学部特任助教)

Female Boarding Workers and Christianity in Modern Japan: The Case of the Mino-Mission

by
Tasuku Aso

Several churches preached the gospel to female boarding workers in modern Japan. One Protestant group called the Mino-Mission also preached the gospel to female boarding workers and built relationships with them. The purpose of this paper is to analyze the relationships between the Mino-Mission and female boarding workers in modern Japan.

The Mino-Mission was established by Sadie Lee Weidner, a missionary school teacher, in Ogaki city, Gifu Prefecture in 1918. Afterwards, she extended the scale of the Mino-Mission while maintaining many relationships with various people in Ogaki city. At the same time, Weidner ran a kindergarten that the children of doctors and members of the municipal assembly attended. On the other hand, Weidner protected widows, mothers and children of fatherless families, Koreans living in Japan, and female boarding workers. They were discriminated in modern Japan. The Mino-Mission had 125 believers and approached people from diverse social classes in the 1920s and 1930s.

In 1933, the Mino-Mission Incident occurred, in which the Mino-Mission was excluded by many kinds of actors in Ogaki city. After the incident, the Mino-Mission continued to preach the gospel in western Gifu Prefecture until 1940, when it stopped its evangelical activities.

Twenty four believers who belonged to the Mino-Mission came from various other prefectures: Fukushima, Tochigi, Nagano, Niigata, Fukui, and Kagoshima. And most of them were boarding workers. Weidner protected and evangelized those boarding workers, who were forced hard work, poor, and discriminated. As a result, one person who was a female boarding worker from the Amami Islands and belonged to the Mino-Mission in the 1930s returned to her hometown and got married to a pastor of another Protestant group. The local evangelism to female boarding workers by the Mino-Mission influenced national scale Christianity activities.